
君の思い出と、君の涙のタオル

菅原明智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の思い出と、君の涙のタオル

【Nコード】

N3303R

【作者名】

菅原明智

【あらすじ】

阿部に密かな想いを寄せる主将・花井だったが、キシリツールガムを噛んだ日から大きく何かが変わっていく。

（前書き）

意味が解らなくても許して下さい。

「……キシリトールの匂いがする」

朝練が終わり、みんなくたたながらも教室に向かっていた。

そんな時、阿部がいつにも増して眉間にシワを寄せながら、苦々しげにそう呟いた。

キシリトールガムを噛んでいたのはオレなのだが、もしやこの匂いが嫌いなのか？ まあ、そういう奴もいるよな。

「あ、わり。オレだわ」

軽く手を挙げて言うと、オレの隣にいた阿部が明らさまに嫌悪感を露わにした。阿部に恋愛的な意味で好意を寄せてるオレとしては、それだけでもかなりショックだった。それなのに阿部は、とどめとばかりにオレからすす……と離れていった。

「え、あ……阿部？」

「……わりー、それ食ってる時は、あんま近寄らないで」

「えっ!？」

ち、近寄らないで……って。なにそれなんだそれ。すっげー傷付くんですけど……！

「なにー、阿部。キシリトールの匂い嫌いなの？」

「……まあな」

横からひよいつと現れた田島が聞くと、阿部はバツが悪そうに顔を逸らしていた。「んじゃーオレ、これから絶対キシリトール食わねーようにしよ」と楽しく言う田島に、既に取り返しのつかなくなつたオレは悲しくなつた。

てゆーか泣きたくなつた。

近寄らないでと言つたのは、ガムの所為なんだろうけど。オレが嫌われた訳じゃ、ないんだろうけど。……分かつてても傷付いてしまふのは、片想いだからだろうか。

いつもと変わらず、午前中の授業が終わり、昼休みも終わった午後の授業。……朝の事をまだ引きずったりしているオレは繊細なんだか女々しいんだか。どっちにしろ、情けない。

一日に何回そこに目を向けるか分からない阿部の席に、ちらりと視線を向ける。いつもは真面目に授業を聞いたりノートを取っていたり、試合前だと黒板も見ずに脳内で作戦会議をしている阿部だが、今日は違った。

机に突っ伏して、（おそらく）眠っている。寝息で肩が微かに揺れているのが、なんか可愛い。

今すぐにも寝顔を見に行きたいという思いに駆られたが、ぐっと我慢した。我慢して、突っ伏している背中をじっと凝視してしまった。……授業が終わってすぐ行けば、見れるだろうか。とそんな事ばかり考えてしまつて、授業なんか聞いているつもりでも聞こえていなかった。

時計をちらちら見つ、視線は常に阿部へと注がれていた。期待感に胸が高まる一方、今朝言われた事も完全に忘れ去った訳ではなかった。

ようやく授業の終わりを知らせる鐘が鳴り響き、オレは教科書も開きっぱなしで不自然じゃないように阿部の席に向かった。

「おい阿部、授業終わったぞー」

なんて小声で言いながら阿部の顔を覗き込んだ。

キシリトールはもう一生口にしないと誓った。えっと、それなら近付いてもいい……んだよね？

阿部の寝顔を拝見しつつ、周りから見ても不自然に思われないように小声で呼びかけ続ける。……なんつーか、寝てる時は年相応だな。うわっ、もう、ちょ、すっげー可愛いんだけど！

「あーべー……………っ!？」

不意にぎよっとして、身体が硬直する。今は閉じられてる阿部の夕
れ目から、透明な雫が滲んでいたから。欠伸とかで涙が出た訳じゃ
ない、オレが見ていた限りでは。だったらこれは、なにかしらの感
情があつて流す、阿部の涙。

っ、と頬を流れ落ちる涙に戸惑いを感じていると、閉ざされてい
た阿部の唇が、そつと開いてなにかを紡ぎ出した。

「……………もと、きさ……………」

もと、きさ……………もときさ？ いや……………モトキさん？ 人の名前か？

その人が、阿部を泣かせているのか？ 誰だ？

……………もしかして……………。武蔵野の試合見に行った時にいた、あのセン
パイぱい人？ あの、阿部の事を”タカヤ”って名前で呼ぶ、シニ
アの人で、確か”ハルナ”とか言う……………

「はーない、阿部の前でなに突っ立てんの？」

「っぎゃあ!？」

咄嗟の事に思わず悲鳴じみたものを上げてしまい、反射的に阿部の
顔を手で隠していた。いつの間にかオレの顔を覗き込むようにして
隣にひよこつと現れたのは水谷で、阿部を見られなくて良かったあ

と安堵の息が漏れた。

「ぎゃあつて……ヒドイよ花井、どうしたの。てゆうか阿部はなに
してんの？」

「みつ、見るな！」

背中水谷の視界を防ぐと、それを避けて阿部を見ようとしてくる水谷。オレは必死にそれを追いかけて、阿部を見られないようにする。うあーっ、阿部の吐息が手の平にかかった！くすぐったいのと同じ時に、好きな奴の吐息とあつてぞくぞくした。こんな時にまで喜んでんなオレーっ！

「なーに、なんで隠すのー？」

「だーッ、しつけれ！」

水谷の無駄に甲高い声が教室内に響き渡り、気付けばクラスメイトがみんなこちらに注目している。あーっ、くそ！こうなったらしようがねえ！翳していた両手を片手に変え、もう片手を右ポケットに突っ込む。そして引きずり出したハンドタオルで、阿部の目元を拭ってやった。

「……………むう……………！？」

するとそこでようやく阿部が目を覚ましたのか、気怠そうに身体を起こす。それはそれで助かったのだが、この状況をどう説明すりゃあいいんだ！

「……やべ、寝ちまった。つうか、何やってんのお前ら」

「あれ、別にいつもの阿部じゃん。花井なに隠してたの？」

「いや……それはー、だな……」

しーんとした教室の中で、言葉を濁すオレが一人注目を浴びていた。うわー、嫌な雰囲気だ。阿部はと言えば顔に掛かっていたオレのタオルを見て、「何コレ」と一人首を傾げている。

……こんな所で、みんながいる前で、阿部が泣いてたなんて言えるか。今日の阿部の泣き顔も寝顔も、オレだけが見たんだ。オレだけのものなんだ。誰にも見せないし、誰にも教えてやらない。

「……阿部、ちょっと来い」

「え、何……うわっ!？」

阿部の腕をぐいっと掴み席を立たせると、そのまま教室の出口へと向かう。寝起きの所為か、阿部は不思議がるだけで抵抗はしない。助かった、普通だったらここでキレられてた。

背中に聞こえるざわめきに耐え抜き、廊下に出ると少し歩いて教室から離れる事を意識した。

「なんだよ花井、どーした？」

「……………あのさー、阿部。さっき、なんか夢とか、見た？」

阿部に振り返ったオレは、意外にも単刀直入に聞いた。すると阿部はすぐに思い当たったのか、ぴくりと肩を揺らす。それを見たら、何故か胸ら辺がズキリと痛んだ。

「……………なんで？」

たつぷり間を置いてから、阿部が警戒するようにオレを上目で窺ってきた。

まっすぐに見つめられて、一瞬うっと言葉に詰まる。が、足に力を入れて、オレもすっかりと阿部を見つめ返した。……………十秒もたず、目を逸らしてしまった。だーくそ、視線が泳ぐー！

「……………あのな、さっきお前……………泣いてた」

「っー！」

阿部の警戒するような目が一転して、見開かれた。そして確認なのか自分の顔にぺたぺたと触れる。オレが拭いた後だしもう乾いてるが、次は阿部自身が持っているオレのタオルに目が行った。

「これ……もしかして花井が？」

「……余計なお世話だったかもしれないねえがな。阿部も男だし、人に泣き顔なんか見られたくないんじゃないかと思って」

「……………そっか」

阿部が俯いた。やっぱり言わない方が良かったか、と後悔しかけた時、阿部がパツと顔を上げた。微笑んでるようにも見えた阿部に、ドキツとする。だがよくよく見れば、それは悲しいのに無理に笑っているような顔だった。

「……うん、見たよ。すっげー嫌いな奴の夢」

「”モトキ”さんて人？」

聞きたかったけど聞くつもりはなかった質問が、口からさらっと出てきた。

阿部は悲しさも、無理に笑う事も忘れたように、純粹な驚きに鋭さを含んだ視線でオレを見た。めいっばいに見開かれた瞳が、オレを掴んで離さない。

なにかを言いたいのに言えないようで、オレは聞かれてもいないの

に「さつき寝言で呼んでた、」と力無く呟いていた。

「……………」

「オレの勝手な想像だけど……もしかして、武蔵野の試合見に行った時、阿部を名前で呼んでた……人？」

阿部は辛そうな顔をしているのに、口からすらすらと言葉が、無遠慮な疑問が出て来る。どうしても出て来るんだ、阿部が傷付いてるの知ってる癖に。でも、それよりも、なんだか。

オレに泣き顔を見られたからじゃない、寝言で名前を呼んでしまったのを悔やんでいるんじゃない。……ただ、他人にそれを聞かれてしまった事に傷付いているように見えた。

「……っ、ごめ」

「そうだよ」

咄嗟に口から飛び出ようとした謝罪が、阿部の肯定に遮られる。阿部はもう一度、「うん、そいつの事」と呟いた。無理矢理言わせてしまった感に、やるせなくなる。

「今朝、花井がキシリトールガム噛んでただろ？ そいつ……榛名が、よくそれ噛んでたんだ。だから匂い嗅ぐと思い出しちゃって、

ム力つく。……ごめんな、花井が悪いんじゃないから」

……そういう事だったのか。

オレは無意識に阿部に嫌な記憶を思い起こさせ、勝手に傷付いてたんだ。でも……嫌いで泣けないだろ。

「なんか、悪かったな。教室戻ろっか」

「え、あ、大丈夫か？」

「全然余裕。ほら、HR終わったら部活だぞ。ま、寝てたオレが言うなって感じだけだな。ははは」

明らかに空元気だった。阿部、それは余計オレが傷付くぞ。

だって阿部、好きなんだろ？ そいつの事。嫌いって言うってても、そいつに纏わる匂いを嗅いだけで思い出して、夢まで見て泣いちゃうんだから。

「……花井」

「え？」

「ありがとな。貸し1だ」

やけに吹っ切れた顔で笑う阿部が、タオルをオレの手に握らせなが

ら言った。ぐあ、反則だ。やべー、可愛すぎる。

今はまだ、そいつを好きでもいいんじゃないか。オレが忘れさせれば、問題ないんじゃないか。阿部の涙が染み込んだタオルを握りしめながら、そんな風に思う。

……あー、このタオル、洗いたくねえなー。

END

（後書き）

ここまで読んで下さって本当にありがとうございます！
もしよろしければ、酷評でも構いませんので、感想お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3303r/>

君の思い出と、君の涙のタオル

2011年10月8日15時42分発行